

文字資料が出土している主な遺跡



仙台市域と日本の略年表

時代区分	年代	主なできごと	時代区分	年代	主なできごと	
旧石器	約30000年前	市内で人が活動し始める (上ノ原山遺跡)	奈良	710年	平城京へ都が移る	
	約20000年前	山田上ノ台遺跡に石器製作跡、 富沢遺跡にキャンプ跡が残される			陸奥国分寺・陸奥国分尼寺が造営される(8世紀中頃)	
	約13000年前	土器の製作・使用が始まる 野川遺跡に石器貯蔵跡が残される 土器の文様として縄文が定着する	平安	794年	平安京へ都が移る	
縄文	約13000年前	六反田遺跡など平野部にもムラが営まれる 上野遺跡・高柳遺跡・山田上ノ台遺跡など 大規模なムラがあらわれる	鎌倉	869年	仙台平野で震災(地震・津波)がある。	
		下ノ内浦遺跡・大野田遺跡で 配石遺構がつけられる			1192年	源頼朝、征夷大将軍となる 伊沢(留守)氏が赴任する 岩切で定期的に市が開かれる (13世紀頃)
		大陸から稲作文化が伝わる 東北地方で稲作が始まる	南北朝	1334年	建武の新政 南北朝にわかれ対立する	
		中在家南遺跡や押口遺跡、 沓形遺跡など仙台平野で稲作が行われる 仙台平野で震災(地震・津波)がある 邪馬台国の卑弥呼が魏に遣いを送る(239)			1338年	足利尊氏、征夷大将軍となる
		戸ノ内遺跡、安久東遺跡で 方形周溝墓がつけられる 遠見塚古墳がつけられる	室町	1392年	南朝と北朝が一つになる 仙台市内各地に城館が造られる	
弥生	BC400年頃	大陸から稲作文化が伝わる 東北地方で稲作が始まる	安土桃山	1573年	織田信長が室町幕府を滅ぼす 豊臣秀吉が全国を統一する	
	400年頃	中在家南遺跡や押口遺跡、 沓形遺跡など仙台平野で稲作が行われる 仙台平野で震災(地震・津波)がある 邪馬台国の卑弥呼が魏に遣いを送る(239)		1590年	伊達政宗、仙台城の縄張りを始める(1600)	
	500年頃	大運寺遺跡で須恵器の生産が行われる 大化の改新		1603年	徳川家康、征夷大将軍となる 伊達政宗、若林城造営に着手(1627) 伊達忠宗、仙台城二の丸造営に着手 (1638)	
古墳	600年頃	仏教が伝わる(538)	江戸	1868年	明治維新	
	645年	郡山遺跡I期官衙が造営される(7世紀中頃) 郡山遺跡II期官衙と付属寺院が造営される (7世紀末頃)				

【※赤字は仙台市内の遺跡に関する事項です】

文化力



仙台市内から出土した「文字資料」をご紹介します!

文字から歴史を探る!!!

仙台市文化財パンフレット 第67集

大野田遺跡出土
ほくしよと き
墨書土器

仙台市教育委員会

文字の使用とその起源

古代中国で発明、使用されたはじめた文字（漢字）は、朝鮮半島を経由して日本に渡り、7世紀中頃には地方でも使われるようになりまし。そのきっかけとなったのが、律令などによる文書行政を基とした統治機能と考えられています。

役所跡である官衙や寺院が日本各地で造営され、記録を紙や木簡などに文字として残すことが始まったと考えられています。仙台市の郡山遺跡から見つかった木簡は、地方において最古級の文字資料であると考えられています。

文字の導入に伴い、硯等の筆記具などももたらされました。古代の硯は陶製の丸い形で、中央に墨を摺る「陸」がある「円面硯」が主流でした。現在の硯に近い形の「風字硯」も後に出現します。その後、硯は石製のものが主体を占めるようになります。土器の底などを利用した「転用硯」も遺跡から出土します。転用硯は墨が残っていたり、摺られて磨かれていたりすることから、土器が硯として再利用されていたことが分かります。

仙台市内の古代の遺跡からは「円面硯」が出土しています。また現在の硯に近い形の「風字硯」も与兵衛沼袋跡から出土しています。石製の硯は中世になってから登場します。

また仙台藩初代藩主伊達政宗の墓所である瑞鳳殿からは具足や太刀とともに、筆や雄勝石製の硯、鉛筆が出土しています。江戸時代の鉛筆の出土は、全国的に見ても数少ない貴重な発見例です。



郡山遺跡（太白区郡山）
上：円面硯
左下：刀子 右下：木簡

木簡とは…

木の札に墨書きされたものを木簡といいます。役所において様々な報告や記録を木札に書き残すことが、役人の重要な仕事の一つとされていました。

寺院跡では、僧侶が書いた木簡が出土することがあります。郡山遺跡内の廃寺跡の井戸跡からは、3点の木簡が出土しています。

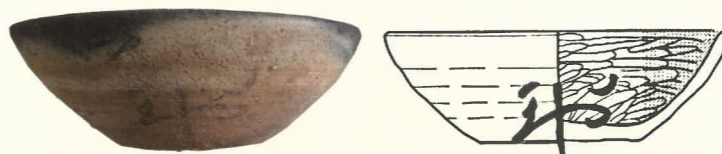


瑞鳳殿（青葉区霊屋）
副葬品出土状況

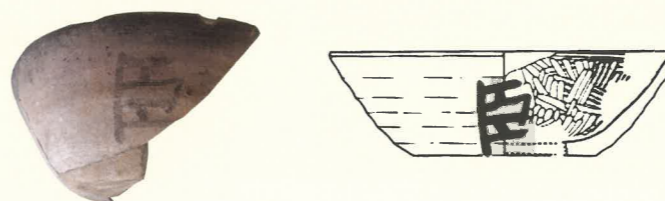
古代人の文字書き ～墨書土器～

奈良・平安時代、東北地方の多くの人々は竪穴住居に住んでいました。人々は戸籍に登録され、国から土地が与えられました。仙台市内の遺跡からは、そのころの集落跡が数多く見つっています。そのうち、南小泉遺跡、燕沢遺跡、大野田遺跡などからは、墨書土器が出土しています。

墨書土器には、1文字だけが墨書されたものがほとんどです。これまで、墨書土器は、一般の人々にどのくらい文字が普及していたかがわかるバロメーターとされてきました。しかし、全国的にみても、限られた種類の文字や字形のみが出土していることから、文字を理解していたのではなく、一種の記号として使われていたのではないかと考えられています。（集落内のシンボルとしての記号、祭祀・儀礼に関わる記号ではないかとする説があります。）



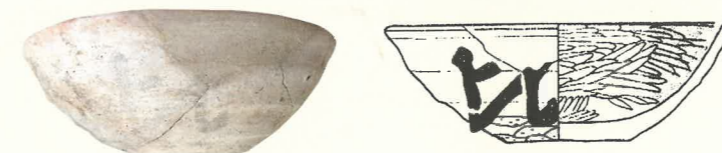
燕沢遺跡（宮城野区燕沢）
土師器 坏 「山部」



後河原遺跡（太白区中田町）
土師器 坏 「臣」



元袋遺跡（太白区大野田）
土師器 坏 「太」



南小泉遺跡（若林区南小泉）
土師器 坏 「比」

墨書土器とは…

焼成後の土器（土師器や須恵器）に墨で文字をかいたものです。奈良、平安時代によく見られます。



墨書土器が出土した集落跡のうち、同じ文字の墨書土器がまとまって出土している遺跡があります。

元袋遺跡の「太」、南小泉遺跡の「比」などです。



瓦に刻まれた文字

文字瓦とは

古代瓦にヘラ書き・指書き・刻印などの方法で文字が記されたものです。

文字数が少ないものも多く、これらは人名・地名・役職名などを簡素に記したものと考えられています。人名や地名が詳細に記され、文字数の多いものも稀にありますが、文字ではなく記号的なものが書かれており、判読不能なものもあります。

焼き上げられる前から文字が入れていることから、瓦の生産に関わる内容を示していると考えられています。

仙台市内では、陸奥国分寺跡や陸奥国分尼寺跡から多くの文字瓦が出土しています。



刻印瓦

- ①物
- ②伊
- ③占
- ④倉
- ⑤矢
- ⑥真

ヘラ書瓦

- ⑦禿
- ⑧郡

指書瓦

- ⑨西

文字瓦が出土した仙台市内の遺跡



陸奥国分寺復元模型

陸奥国分寺跡 (仙台市若林区木ノ下)

奈良時代に聖武天皇が国を擁護するため諸国につくることを命じた「金光明四天王護国之寺」が国分寺で、陸奥国分寺もそのうちの一つです。



与兵衛沼窯跡 (仙台市宮城野区柁江ほか)

台原・小田原丘陵の南斜面にある古代の窯跡の一つ。陸奥国分寺、国分尼寺や多賀城で使用する瓦を製作していました。

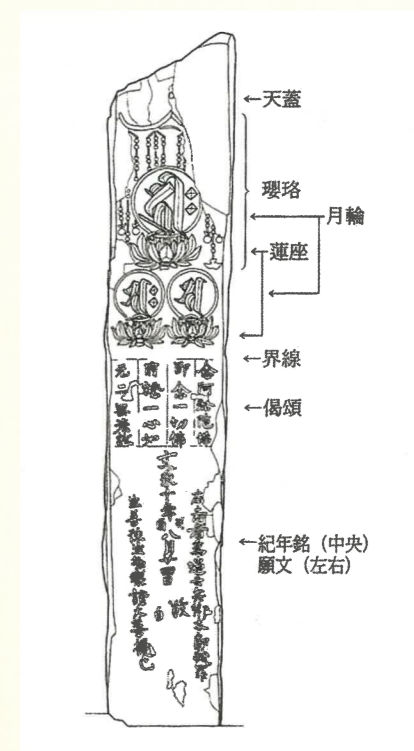
文字に込めた願い

仙台市内の中世の遺跡から出土する文字は、木に記されたものと石に記されたものがあります。

木には、災厄を除去し福を招く「呪符木簡」と、死者への供養や後世安楽を願って作られた「柿経」などがあります。呪符木簡には「急々如律令」という文字が表面に記されています。元々は中国の公文書に使われていた言葉ですが、日本では災いを除去するまじないの言葉として用いられました。

石には亡くなった人の冥福を祈るために造られた板碑や梵字が書かれた一字一石経があります。板碑には仏のすがたや仏を表す梵字である種子、紀年銘、造立者名、造立をした理由などが刻まれています。仙台市内では宮城野区と太白区を中心に約600基の板碑が確認されています。

仙台市内から出土した中世の文字資料は、当時の人々の信仰や願いを知ることができる貴重な資料です。



洞ノ口遺跡 (宮城野区岩切) 呪符木簡



東泉板碑群 (泉区福岡)

梵字とは…

梵字はサンスクリット語を表記するために使用する文字です。板碑には種子として仏・菩薩などを示す梵字が刻まれています。仙台市内では、大日如来を表す「バン」という梵字が刻まれている板碑が多くあります。



「バン」(大日如来)

銭貨に刻まれた文字

日本における貨幣の流通は、奈良時代の皇朝十二銭の発行から始まります。その後、北宋銭や明銭などの「渡来銭」が広く普及します。江戸時代に入ると、寛永通宝などの銅銭だけでなく、金貨や銀貨を国内で鑄造するようになります。

仙台市内の遺跡からも、唐銭や北宋銭などの渡来銭、寛永通宝などの国内銭など様々な貨幣が出土しています。

仙台の遺跡から出土した国内銭



宝永小判
(善応殿—仙台藩第3代伊達綱宗墓所—出土)



慶長一分金
(瑞鳳殿—仙台藩初代藩主伊達政宗墓所—出土)

遺跡名	出土品	出土品
後河原遺跡	寛永通宝 寛永通宝 (背盛)	古寛永 新寛永
仙台城三の丸跡	寛永通宝 寛永通宝 一分判金 十銭	古寛永 新寛永
東光寺遺跡	寛永通宝 一銭	
茂庭けんとう城跡	寛永通宝	
山田条里遺構	文久永宝 寛永通宝 桐一銭	
陸奥国分寺跡	寛永通宝	古寛永 新寛永

※上記の他にも多くの銭貨が見つかっています。

遺跡から発掘された銭貨の意味 ～六道銭の発掘から～

六道銭とは、死者を葬るときに棺の中に入れる6文の銭のことです。三途の川の渡し銭、または冥界の旅費にするとされています。



六道銭が見つかった甕棺 (茂ヶ崎城跡出土)

出土文字資料が語る仙台城

造酒屋敷跡より出土した木簡

平成21年の仙台城跡(造酒屋敷地区)の発掘調査で、井戸跡から木簡が出土しました。

木簡は大きく2つの種類に分けられます。1つは、表に「御酒塩五升」など酒塩(※調味のために入れる酒)という品名とその容量が書かれ、裏には榎森家の当主である「榎森与左衛門」の名前があり、榎森家が酒塩を出荷する際に容器に付けた木簡であると考えられます。

もう1つは、表に「御年貢米四斗五升入」などと年貢米の数量が書かれており、裏には村名(米の産地—「国分霧カ谷村」—現在の宮城野区鶴ヶ谷付近)と人名(差出人—「七兵衛」)—が見られます。この木簡は、年貢米として仙台藩に納めた際の荷札木簡であると考えられます。仙台近郊の村から藩に納められた年貢米が酒造りに使われていたと考えられます。



年号を示す石材が見つかっています!

本丸北部の石垣を解体している過程で、「元文」と刻まれた石材や「寛文」の朱書痕がある石材が見つかっています。「伊達治家記録」によると、元文元年(1736)、寛文8年(1668)に地震があり、幕府に石垣修理を願い出たとあります。見つかった石材は、この修理に用いられた石材であった可能性が考えられます。



「元文」と刻まれた石材の写真(左)と拓本(右)



「寛文」と書かれた石材の写真